

ゲーテの自然観

——ゲーテの自然科学研究の意義について——

(その1)

溝 井 高 志

目 次

- はじめに
- I ゲーテとカント
- II 疾風怒濤期のゲーテの自然観
- III ゲーテの自然科学論（別稿にゆずる）
- おわりに

はじめに

疾風怒濤期を経て、ドイツのみならず、すでにヨーロッパにおいて高名な文学者であったゲーテが、ワイマル公国に招聘されて後、どうして自然科学の研究に携わらざるをえなかったのか。これは一つの謎であろう。従来はただ単なる一文学者の手すさび、片手間の仕事として本格的に顧みられることがなかったゲーテの自然科学論に照明をあて、そこに大きな意義を発見したのは、R. シュタイナーであった。R. シュタイナーはヨーゼフ・キュルシュナー編集の『ドイツ国民文学叢書』の中のゲーテの自然科学論文の校訂を任せられ、それがきっかけとなり、R. シュタイナーはゲーテの自然科学論の価値を高く評価し、それ以後、ゲーテの自然科学研究の意義は広く知られるところとなった。それまではむしろ一人の天才詩人の笑止千万な奇作だという評価が一般的であった。しかも当時はまだ無名の学生であったR. シュタイナーにその校訂の仕事が任されたという事実、当時の無視同然の極めて低かったゲーテの自然科学論文の評価が端的に示されている。しかも、コリン・ウィルソンもいみじくも言っているように、「ゲーテの自然科学論文の校訂は、

まず誰もすすんではやりたがらないような仕事だった」¹⁾ というのが事実であろう。そのゲーテの自然科学論文の低い評価の背景には、すでに高名であった天才的な詩人が自然科学研究に携わることがいかにも奇異に、唐突に受け止められたということもあろうが、自然科学者としては素人同然の筈の一文学者が向こう見ずにも当時の誰によっても否定しがたい物理学の権威とみなされていたニュートンに反旗を翻したということがゲーテの自然科学論の価値を低いものにした決定的な理由と思われる。生前には幾人かの賛同者がいたとは言え、それ以後は、R. シュタイナーによって再発見されるまでは、ゲーテの自然科学論文の意義はほとんどと言っていいほどに理解されることがなかった。現在においては、ゲーテの自然科学上の個々の発見には、すでにそれほどの重きはおかれていないにしても、それらの発見を促したゲーテの自然観、世界観の意義は自然科学の領域からもあらためて評価されるようになり、特にノーベル賞受賞の物理学の権威であるハイゼンベルク等の自然科学者によるゲーテの自然科学論の意義の発見によって、その評価はいよいよ確かなものとなっている。

私にもまたゲーテが自然科学の研究に携わらざるをえなかった理由は長く不明であり、或いは奇異に思え、私はその動機を明らかにしたいとかねてから願っていた。ゲーテが自然科学研究に携わらざるをえなかった精神的背景、動機、その必然性を明らかにしながら、ゲーテの自然科学研究の意義とゲーテ文学との重要なかわり合いについて、R. シュタイナーのゲーテ理

解を基礎にしながら、以下において明らかにしてゆきたい。

もなるものが欠けている。³⁾

(筆者傍点)

I ゲーテとカント

ゲーテの自然観を端的に示すものとしてしばしば、イエーナでの自然研究協会の集まりに同席した後、ゲーテがシラーと交わした会話が挙げられる。戯曲『群盗』で華々しく文壇にデビューしたシラーをかつての自分と同じ主観性の過剰なエントウジヤストとみなし、彼がかつての自分を思い起こさせるという怖れから、病的なまでにシラーとは親しく交わることをゲーテは忌避していたが、この自然研究会の集まりの帰途、たまたま二人が一緒になった時の出会いの際に交わした会話を通して、ゲーテとシラーには以後変わることのない親交がもたれることになる。そのきっかけとなったのは次のシラーの言葉であった。シラーは自然研究協会での科学者連中の発言を評してこう言う。

あのような方法は門外漢には決して好感を抱かせるものではない。……自然が分解されるのではなくて、自然が生き生きと活動し、全体から部分へと向かっていくもっと違った自然のとらえ方があるはずである。

と。²⁾ これはゲーテの最も基本的な自然観を代弁するものであり、この言葉の中に、ゲーテは自分と同じくする精神がシラーのなかにあることを認め、歓喜する。両者の考えに共通していたのは自然を統一的な働きとして観る眼であった。ゲーテは『ファウスト』の中で、こう記している。

生きているものを認識し、それを記述しようとするものは、
まず精神を度外視してかかる。
たとえその時に部分を手に入れたとしても、残念なことにそこには精神的な靱帯と

ここで言う「精神的な靱帯 (das geistige Band)」とは、自然の統一的な働きであり、その統一的な働きを観る眼であろう。部分的な知識をいくらか手に入れたとしてもその部分的な知識を結ぶに足る統一的な視点が欠けているとしたら、その自然認識はいかばかり虚しいものであろうかという思いがそこにはある。しかしこの幸運な出会いにもかかわらず、続いて交わされた会話において、二人の立場には微妙なズレが生じる。シラーはカント哲学の徒として、現実の自然世界の中に理念の働きを直接見ることをしない。ゲーテがメモして提示した「原植物 (Urpflanze)」を見て、それは理念に過ぎないとシラーは一蹴する。

ゲーテ的な世界観では、アイデア (理念) の世界がその本質的な姿で自然において観照される。ゲーテ的な世界観では、自然においてアイデア世界の本质について認識することがわれわれに許容されている。そもそもゲーテにとって現象世界とは別に、物自体といった世界は存在しない。一切は現象している。言い換えるなら、理念の世界はこの世界に余すところなく現象していて、現象とは別の理念の世界なるものは存在しない。ただわれわれが現象をその本質において知りつくせるかどうかは別の問題である。にもかかわらず、一切は現象している。これはゲーテの詩人としての直観であった。

ゲーテはファウストをしてこう語らせている。

霊の世界が閉じられているのではない。
汝の感覚がふさがり、汝の心が死んでいるのだ。⁴⁾

世界はその本質において閉ざされているのではない。ただわれわれの耳目がふさがり、われわれの心がともすれば死んでいるが故に、世界はその本質においてあらわになることがないのに

すぎない。天才的な詩人的直観をもってすれば、世界は豊かにその本質をあらわにしていると言って過言ではない。現象する世界の背後に認識の世界を広げていくことの不毛を痛感していたという意味では、ゲーテはカントの立場に立つと言うことができようが、現象の背後の世界を仮に想定し、仮想界としての物自体なるものを設定し、現象世界に物自体の世界の端的な反映を見ないカントの立場は、明らかにゲーテの立場とは異なる。とは言え、ゲーテは意識的に明快に自らははっきりとカントとの間に一線を画しているわけではない。「なるほどカントの見解に言及して、あたかも賛意を表するかのような意見を個別にゲーテが述べていることは事実である」⁵⁾が、カントに賛意を表する趣旨の発言をゲーテはたえず口にしながら、常にそこには一抹の歯切れの悪さがうかがわれる。明快な論理的な形でそのズレを彼は口にすることができなかったが、その詩人的直観によって、彼はそのズレを微妙に意識していた。

カントに対して一応の賛意を表しつつ、カントに対するある種の戸惑いをゲーテは論文『近代哲学の影響 (Einwirkung der neueren Philosophie)』の中で次のように記している。

カントの『純粋理性批判』はすでにとっくに刊行されていたが、しかしそれはまったく私の関心の外にあった。それにもかかわらず、私はしばしばそれが話題になる場に同席することがあったので、いくらか注意を払って耳を傾けることで、われわれの自己と外界がわれわれの精神的な存在にどれくらいの寄与をしているかという昔からのテーマがあらためて蒸し返されているのに気づいた。私は決して両者を分離したこともないし、私なりのやり方で、いろいろな対象について哲学する場合には、無意識の素朴さによってそれをやってのけていた。そして実際私の見解をいま目の前にしているように思った。しかしその論争が始まるとすぐに、人間に最も敬意を払う側に私は

喜んで立ちたいと思ったし、たとえわれわれのすべての認識が経験とともに始まるにしても、だからと言ってまたそれらの認識がすべて経験から生じるのではないという見解をカントと共に主張する友人たちに喝采を送るのに私はやぶさかではなかった。ア・プリオリな総合的な判断と同様に、ア・プリオリな認識もまた私の意にかなうところであった。なぜなら、私は生涯を通じて詩作し、観察しつつ、総合的に、そしてそれから再び分析的なやり方を行っていたからであった。人間の精神の収縮 (Systole) と弛緩 (Diastole) は、私の場合には第二の呼吸のように決して分けられることなく常に働いていた。ただこれらすべてのことに対して、私は表現すべき言葉と、同様に用語を欠いていたが、今はじめて一つの理論が私に微笑みかけてくるように私には思われた。私の意にかなったのはその入口のところであって、迷宮そのものには敢えて私は踏み込むことができなかった。それを私の詩作の才が妨げたこともあれば、常識が妨げたこともあった。こうして私はどこにも自分がそれによって教えられるところがあるようには思えなかった。⁶⁾

人間の認識が経験と共に始まるにしても、認識は人間の側からするア・プリオリな認識能力をまっけてはじめて可能であるというカントのコペルニクスの展開の意義をゲーテは認めている。「私は人間にもっとも敬意を払う側に味方する」という言葉の謂いはそこにある。認識は経験から生じるのではなく、むしろ人間の主観性に認識の根拠を置くという点ではゲーテはカントの立場に立っている。或いは、人間に分析的判断と総合的判断という二つの判断の仕方があるとするカントの主張に**分析と総合** (Analyse und Synthese) を自らの思考のサイクルとするゲーテは自らの理論に対する一つの強力な拠り所を得るものと考えた。しかしこれはゲーテがカントの考え方を自分の都合の良い

ように曲げて解釈することによってであって、カントを忠実に解釈することによってカントを評価しているわけではない。ゲーテ自身、「ただ私の意になかったのは入口のところであって、迷路そのものには私は敢えて踏み込むことができなかった」と言っているように自分に都合のいいところにだけ耳を傾けているのであって、忠実にカントの見解を解釈することによって、カントを評価しているのではない。ただそれまで表現すべき言葉、まして用語をもたなかったゲーテが自分の考え方を表明するのに都合のいい表現をそこに見いだしたに過ぎなかった。「各人はそれぞれ自分の意になかったようにしか啓蒙されえないのである」⁷⁾とゲーテは言っている。しかし、『純粹理性批判』にあっては深く踏みいることをしなかったゲーテが、『判断力批判』に関しては、積極的なカントへの評価を口にしてしている。

しかしそうこうするうちに『判断力批判』が私の手元に入った。そのおかげで私は最高に楽しい生涯の一時期を過ごすことができた。ここには私のまるで異質な仕事と並べて論じられ、芸術と自然の所産がそれぞれ同じように取り扱われているのを見た。美的判断力と目的論的判断力が相互に照らしあっていたのである。⁸⁾

『純粹理性批判』では、入口のところまでしか踏み込むことのできなかったゲーテが『判断力批判』はそれを熟読することで最高に楽しい時期を過ごすことができたほどに、そこに自分の考えが極めて整然とまとめられているのを見た。特に「美的判断力 (das ästhetische Urteilskraft)」と「目的論的判断力 (das teleologische Urteilskraft)」を同じ機能としてカントが認めている点に、合目的性をその対象とするという意味で芸術と自然研究に同じ意義を認める点において、ゲーテはわが意を得た思いがし、二つの判断力について自分の考え方が極めて意になかった形で論述されているのをゲーテ

はそこに見た。『純粹理性批判』においては、判断力が特殊なものを普遍的な概念へと包摂する規制的判断力として、それはもっぱら悟性と感性的なものを結ぶ仲介的な働きをするものであったのに対して、『判断力批判』では、判断力にもっと豊かな機能をもたせ、たとえ、規制的な概念を欠いている場合にも、判断力に反省的に普遍的なものを構想し、描出するア・プリオリな機能を認めている。もちろん、その判断力によって見いだされる概念はあくまでも普遍的である「かのように」表象されるにすぎず、それは客観的に見いだされる自然概念でもなければ、道德法則の根拠として要請されるべき自由の概念の類でもない。あくまでも、そこにカントは主観的な原理である格率としての意味を認めているにすぎない。カントは自然のうちに合目的性を否定せず、むしろそれによって自然界と超感性界の二元論を克服できる可能性を考えていたが、しかしその場合にも、カントは自然界の中に合目的性が客観的に存在していると主張しているのではない。あくまでも、われわれの反省的判断力は自然があたかも合目的性をもつかのように描出することができるというに過ぎない。

カントによれば、自然の根底に超感性的なものが存在し、その目的に従って有機体がつくられているとわれわれは主張することはできない。感性界と超感性界を仲介する働きとして考えられた判断力をもってしてもその両世界の間隙を完全には埋めることはわれわれにはできないというのがカントの基本的な考え方に他ならない。しかし自然界において合目的性をもつと考えられる有機体についてのカントの見解は、ゲーテのそれに極めて近いものがあり、その点で、ゲーテはカントに対して深い共感を示している。このカントに対しての共感とカントに対してのある種の戸惑いを、ゲーテは論文『直観的判断力 (Anschauende Urteilskraft)』の中で更に次のように記している。

深く入り込むことは望んではいなかったけ

れども、カントの学説をできるだけ利用したいと思っていたとき、この優れた男（カント）はしばしばいたずらっぽいイロニーを弄んでいるように私には思われた。彼はある時には認識能力を極めて狭い能力に限定しようと努めながら、ある時には、彼自身が引いた限界線を超えていくようにと目くばせを送りながらわれわれを促しているように思われた。⁹⁾

つまり、「われわれの大先生（カント）は自らの思考を反省的、推論的な判断力に限定し、規定的な判断力はまったく認めてはいない。にもかかわらず、われわれを十分に狭い範囲へ、あるいは絶望へと追いやりながら、その後ですぐに極めて自由な発言を行うことを決心し、彼が多少なりとも認めていた自由をどのように使うかをわれわれに任せる」¹⁰⁾。このカントがある程度まで容認する原型の知性、即ち、「推論的な悟性のようではなく、直観的であるために、総合的に普遍的なものの、全体そのものの直観から、特殊なものへ、全体から部分へと進んでいく」¹¹⁾ 原型的知性（*intellectus archetypus*）をゲーテは敢えて行使し、「かの原像的なもの、原型的なものへと休みなく駆り立てられ、ついに自然にかなった表現を見いだすことに成功した」¹²⁾。

カントがイロニーッシュにしか見ることのなかった、自然の中に有機的な働きを観、それを原型のなものとして探究する「理性の冒険（*das Abenteuer der Vernunft*）」をゲーテは、大胆に敢行する。ここにゲーテとカントの明瞭な相違がある。カントが自然の中に有機的な統一、合法則性を看取する判断力のア・プリオリ性を認め、その点でゲーテがカントを評価し、そこに、カントとゲーテの一致点があったことは事実であるが、カントが自己に相對峙する自然の中に物自体と経験世界の断絶を明確に意識していたこともまた事実である。その点にカントとゲーテの克服しがたい断絶がある。カントもまた「世界は神に根拠をおく完全なアイデアの

世界の不完全な反映となる」¹³⁾ という西洋の哲学思想の伝統を踏まえ、理念の世界と経験的世界の乖離を説く点では、カントもまた西洋の哲学的な思想の系譜の中にある。経験世界の中に生き生きとした理念的なものの反映を観るゲーテの詩人的直観とは相容れない西洋思想の病弊とも言うべきものがカントの中にある。ゲーテにとって現象することのない物自体は存在しない。否、物自体なるものがゲーテにとってはそもそも存在しない。人間が認識しつくせるか否かは別にして、一切は現象している。ゲーテとカントの断絶の一点はひとえに自然の中の有機的なものを理念的なものの明瞭な反映と観ることができるか否かの一点に尽きる。R. シュタイナーは言っている。

ゲーテ的な世界観を前にして、カント的な世界観はただ次のようなものであると言うことができる。すなわち、古くからの誤った考え方の除去、現実への自由な本来的な現実性への関与を通してではなく、教え込まれ、受け継がれてきた哲学的、宗教的な先入観が論理的にないまぜになったところから、このような世界観が成立したのである。このような世界観は自然の中の創造に対する生き生きとした感覚が未発達なままである精神からのみ生ずる。そしてこのような世界観は、同様の欠陥をもつ精神にのみ影響力をもつことができる。¹⁴⁾（筆者傍点）

このような西洋思想の流れの中で異端者とも言うべき、自然の中に生き生きとした創造の働きを観るゲーテにとって、自然科学研究の意味するところはどこにあったのであろうか。

それを問う前に、自然科学研究に積極的に携わる以前の、疾風怒濤期のゲーテの自然観について瞥見しておきたい。

Ⅱ 疾風怒濤期のゲーテの自然観

ゲーテにとって、自然は極めて調和に満ち、合目的なものであったとしばしばみなされがちであるが、必ずしも、単純に、そのように見ることはできない。若いゲーテの自然観を明瞭に表すものとしては、断片的な文章『自然(Die Natur)』がある。これは後にゲーテ自身が著したものでないことが判明したが、彼の自然科学の論文集に納められたこの文章は、当時のゲーテの自然観をよく代弁している。

自然！ われわれはそれによって取り囲まれ、抱かれ、そこからはみ出すこともできないし、それ以上にそこに深く入り込んでいくこともできない。乞われもしないし、待たれてもいないにもかかわらず、自然はわれわれをその踊りの輪の中に抱え込み、われわれが疲れ切ってその腕から抜け落ちるまで、われわれを前へ前へと駆り立てる。¹⁵⁾

この断想から窺えることは、人間と自然は一体であるという考え方であり、そこには微塵も人間の恣意の入る余地はなく、従って、人間にはなんらのとがも功績も認められない。一切の功罪は自然に帰せられる。

自然みずからは言葉をもたないし、話すこともできないが、自然はもろもろの舌と心を作り出し、それを通して感じたり、話したりする。¹⁶⁾

真実であることも誤りであることも一切を自然は語ってきた。一切が自然の責任であり、一切がその功績である。¹⁷⁾

自然はそれ自身で話す言葉も感じる心臓ももたないが、人間という被造物を通して自然は言葉を語り、感じることができ、創造することができる。逆に言うならば、人間とは自然の器官で

あり、人間が生み出すものは一切自然の功績であり、自然の責任となる。この自然との一体感の自覚から生じる歓喜と恍惚、そしてそれから疎外されてあることの苦しみ、それが『若きヴェルターの悩み(Die Leiden des jungen Werther)』の主要テーマであり、疾風怒濤期を通じてのゲーテの主題となる。

『若きヴェルターの悩み』第一部には、自然との一体感からくる歓喜と恍惚がふくいくたる香りをもってみずみずしく描かれている。ヴェルターは息づく自然の中に陶然と身を浸し、自然との、万物との一体感に酔いしれる。ヴェルターの高揚した感受性は、自然が「大地の底で作用し合い、互いを創造し、働き合う」¹⁸⁾のを敏感に感じ取る。それはただ単に自然の息吹にとどまらない。「全能の神の存在」「愛なる神の息吹」をさえもひしひしと身近に感じ取る。更には、「神のごとく感じること」「全一的生命の把握」「全一的直観」こそがヴェルターの求めるものであり、「無限なるものの泡立つ杯からあのあふれ出る生の歓喜を飲みほし、たとえ一瞬たりとも、私の胸の限られた力の中で、一切を自身においてそれ自身の中から生み出す存在の至福の一滴を味わってみたい」¹⁹⁾と渴望する。その歓喜の頂点において滅びをさえも願う。このヴェルターの自然との一体感からくる至福は、情熱の、感情の、愛の高揚をまっけてはじめて可能であって、その意味で、ヴェルター的な自然の認識は「愛による認識」と言うことができる。

しかし、その愛が、感情が、情熱が枯渇するとき、自然はその恐ろしい相貌を見せはじめる。『ヴェルター』第二部において、彼の愛が閉ざされ、その出口が見いだせなくなるとき、彼はとめどない無果なる気分へ落ち込んでいく。そして、心が死んだと絶叫せざるを得ない瞬間がやって来る。涙さえも乾く。自らの内にみなぎっていたものはどこへ行ったのかと嘆かざるを得ない瞬間が訪れる。

生き生きとした自然に触れて私の心を満た

した暖かい感情は、大いなる歓喜の洪水で私を満たし、私を取り囲む世界を楽園につくりかえたが、それが今や私には耐え難い拷問者となって、私をどこまでも追い立て苦しめる霊となった。²⁰⁾

私の前で一枚の幕が取り払われ、限らない命のあらわれが私の前で永遠に開かれた墓の深淵と化した。²¹⁾

ああ、この心の空白！ この私の胸に感じる恐ろしいまでの心の空白！²²⁾

私の感覚は何と干からびてしまったことだろう。一瞬とて心の充実もなければ、至福の時もない。無だ！ 無だ！ のぞき眼鏡の前に立つかのように、私の前では、人間が、駄馬がぐるぐる回っているのを見る。そんな時、私は自分に問うのだ。それは目の錯覚なのではないかと。私はともに芝居をし、いやむしろ操り人形のように動かされ、そしてしばしば隣にいる人の木の手をつかんで、ぞっとして身を引くのだ。²³⁾

私は思う、私にのみ罪があることを——いや罪ではない！ 私の中に一切の悲惨の源が隠されていることを。それだけで十分だ。かつてはすべての至福の源が私の中にあったというのに。この私は一体、感覚のみなきる充実の中に漂い、一歩歩むごとに楽園に足を踏み入れ、全世界を愛の限りに抱き締めたあの私なのだろうか。その心が今は死んでしまった。もはやいかなる感激もそこから流れ出ることがなく、私の眼は乾き、私の感覚は心なごませる涙にうるおうことなく、神経が不安げに私の額のところに皺をつくる。苦しい。けだし、私の生の唯一の歓喜であったもの、神聖にして命を生み出す力であったもの、それが失われてしまった。どこへ行ってしまったのだ！・・・ああ、この素晴らしい自然が私の前で、二

スを塗られた絵のように精彩を失い、あらゆる歓喜がその至福の一滴をも私の胸奥から脳へ汲み出すことができなくなった。この男が今や神の前にひからびた泉、水の漏れた桶のようにつつ立っている。²⁴⁾

自然のいたるところに隠されて、一切を侵食する力、それが私の心を掘り崩す。それが生み出すものは隣人をも自分自身をも破壊してやまない。そこで私はよろめいて不安におびえる。天と地とそれを織りなす力が私のまわりを取り囲む。私が見るのは永遠に一切をのみ込み、永遠に反芻する怪物以外の何ものでもない。²⁵⁾

(以上、筆者傍点)

これらの文章に、自然との一体感に酔いしれるゲーテとは別の、自然との一体感から疎外された疾風怒濤期ゲーテのもう一つの側面である苦悩がヴェルターを通して描かれる。「ニスを塗られた絵 (ein lackiertes Bildchen)」 「のぞき眼鏡の前に立つ (vor einem Ratitätenkasten stehen)」 といった表現に、「ひからびた泉 (ein versiegter Brunnen)」 「水の漏れた桶 (ein verlechter Eimer)」 のようなヴェルターの心の、感情の枯渇に伴ってあらわれる自然の新たな相が示されている。ここには、自然の中にみなきる命、生成・創造する力、有機的・全一的自然の姿は見られない。むしろ、ゲーテが嫌悪し退けた無機的自然の相があらわとなる。自然の相だけではない、彼自身が「操り人形 (eine Marionette)」 のように、生成する自然から疎外されて、生きているという実感を喪失する。

これらの文章で注目すべきは、このヴェルターの悲惨、苦悩の源泉は彼自身の中にあると、彼が告白している点である。彼の至福の源も彼自身の中にあったが、彼の悲惨、苦悩の源泉もまた彼自身の中にある。今、彼は自然を、その統一的・有機的な働きとして、生き生きと生成・創造する自然の力を感じ取ることができない。生きているものへの愛・エロスを欠くとき、

自然はバラバラのものとして、関連性を失い、無機質化して見えるようになる。彼はエロスを通して、宇宙万物との一体化の感情、自然への愛を獲得していたが、それを失うとき、自然は「永遠に反芻する怪物 (ein ewig wiederkäuendes Ungeheuer)」と化する。

こういった内面と外面の相関関係は『ファウスト (Faust)』においても、顕著に見られる。ファウストの嘆き、苦悩もまたそこにあった。自然との、生命との豊かな相関関係を回復したいという切実な願いが『ファウスト』の出发点になっている。ヴェルターは生きた自然との豊かな相関関係から締め出されることによって滅ぶが、ファウストはまさにそこから出発する。R. Ch. ツィンマーマンの「ヴェルターの終わるところから、ファウストは始まる (Wo Werther endet, fängt Faust an.)」²⁶⁾ という言葉はまさに至言である。

ファウストは旧来の手垢にまみれた知識、硬化した知識に辟易としている。そういう断片的な知識をいくら収集したところで、生きた自然の韌帯とも言うべき統一的・全一的な生の実相に触れることができないことに彼は絶望する。すすけた見出しの紙切れ、書物の山、ガラス機、缶、実験道具、先祖伝来の家具、彼の研究室を取り囲む一切がそういった「死せる知識」の象徴として、彼にはのろわしく見える。こんな生活は犬でもごめん被るだろうと彼は嘆く。かくて、彼はアカデミックな学者にとってはタブーであるはずの神秘思想へと向かう。ここではノストラダムスの名を借りて神秘思想を代表させているが、ここで披瀝されている神秘思想はむしろ、当時彼が思想的に共鳴するところの多かったスウェーデンボルグのそれであることはしばしば指摘されている。²⁷⁾ まずファウストはノストラダムスの書を開き、大宇宙の印を見る。

ほう、これを目にすることの何という歓喜。

突然、私の五官の中で、
若々しい神聖な生の幸福が

あらたに燃え上がり、私の神経と脈管の中を流れるかのようだ。²⁸⁾

私は神ではないのか？ 私には今は何もかもが明るく見通せる。²⁹⁾

霊の世界が閉じられているのではない。
汝の感覚が閉じられ、汝の心が死んでいるのだ！³⁰⁾

失われていた自然との相関関係が回復されたかのように見える。若々しい生命が身体の隅々まで行き渡り、五感が蘇り、内面的な生の実感が取り戻されるとき、あたかも自身が神にでもなったかのように、自然は再び豊かな実相を現わすかのように見える。心が死んでいたのであって、心が蘇るとき、自然は再び豊かな躍動を見せ始める。これはヴェルターが痛切に実感したところであった。しかしこの歓喜も一時的なものに過ぎない。心の躍動が失われるとき、自然の相は再び一変し、豊かな生命を喪失し、無果なる相貌を示し始める。

何という見物だろう！ しかしああ、所詮は見物に過ぎない。

どこでとらえたらいいのだ？ 無限の自然よ。

汝の乳房はどこにある？ あらゆる生命の泉よ。

天と地はそこから命を得、
干からびた胸はそれを恋い焦がれる。

汝は溢れ、汝は万物に飲ませ、そして私は
むなしく渴いて苦しむのか？³¹⁾

所詮は見物に過ぎなかったこと、観想的生の空しさを彼はここで痛感する。観想をもってしては根源的な生には届かないことを、再び、彼は自身が生きた自然から疎外されていることを痛感する。より根源的な生に近いものを彼は求める。次に彼は地霊 (Erdgeist) の印を見る。するとどうであろうか。彼にはみるみるうちに強烈な

生の実感が蘇る。

まるで違うぞ、この印からくるものは！
地の霊よ、お前こそが私に近い。
すでに私の力の高まりを感じる。
すでに新しい酒を飲まされたような気分だ。
今は世界に打って出て、
この世の苦しみと、この世の幸福を担い、
嵐と戦い、
難破する船のきしみにもおじけなぬ勇気をおれは感じる。³²⁾

しかし、ファウストが地霊は自分に近いと思っていたのは彼の錯覚であって、彼が近いと思ったのは、彼が追い求めるものに近いというだけであって、彼自身はやはり生命の直接性からは遠く隔たっている。やはり彼は生きた自然からは締め出され、疎外されている。圧倒的な生の潮を前にして彼は縮み上がる。生きた自然からは疎外されてある学者の悲劇を彼は痛感する。ファウストが地霊に「おまえと同等のものだ」と呼びかけたのに対して、地霊は「おまえはおまえに理解できる霊に似ているのだ。おれには似ていない」と言って突き放す。³³⁾ ここで地霊は自分を次のように表現している。

生命の充溢と、嵐のような行為の中で、
おれは膨らみ、収縮し、
かしこに赴き、こなたに退く、
俺は生誕と墓、
永遠の海の満干
とりどりにはたを織りあげ
灼熱する生である、
このように、時というざわめく織機で俺は
創造し、
神性の生ける衣を作り出す。³⁴⁾

(筆者傍点)

この地霊の活動形式は、「生誕と墓 (Geburt und Grab)」, 「生産と破壊」, 「創造と滅び」に

ある。これが根源的生とも言うべき地霊の実相である。創造の相と共に、むしろ強烈に破壊の、暴力の実相が彼に激しく迫る。その生の暴力的とも言うべき相に触れて、彼は虫けらのごとく縮み上がる。疾風怒濤期後期のゲーテにとっての自然の実相とは豊かにわれわれを生かし育て慈しみあふれた自然の姿ではなくて、むしろわれわれを圧倒し、破壊し、死へと導く暴力的な自然の脅威であった。その自然の直接的生への恐怖から、メフィストの力を借りて、直接的な生からは一歩引きつつ、いびつな形で、この暴力的生に身を委ねる過程で、ファウストがグレートヒェン悲劇を生み出していったことは周知の事である。その過程についてはここでは割愛する。

疾風怒濤期を終えようとする段階において、ゲーテは自然との新たな対応を迫られる。

この疾風怒濤期後半から中期のワイマール期にかけて、ゲーテが関心を寄せたのはスピノザの哲学であった。恣意的な感情の振幅の激しさに疲れ果てたゲーテは自然をその必然性の相においてとらえようとするスピノザの哲学にしばしの精神の憩いを求める。「不快な感情は知覚に端を発し、そのような観念が人間の中に欲望、情熱を生み出し、それに身をゆだねる時、人はその奴隷となる。理性から生じるもののみが無条件的な快の感情を呼び起こす。人間の最高の幸福とは、理性的な観念の中に生きることであり、純粋な観念の世界に身をゆだねることである。知覚の世界から生じるものを克服し、さらに純粋な認識の中で生きるもののみが最高の幸福を感じる」³⁵⁾ というスピノザの哲学にゲーテはしばらく心酔するが、しかしそれはあくまでも一時的なものであったと考えたい。確かに、神と自然を不二一体のものとしてみるスピノザの「神即自然」という直観はゲーテのものであり、ゲーテの自然観を単純に公式化すれば、そういうことになるが、R. シュタイナーが言うように、ゲーテは基本的には知覚の人である。経験的な知覚、あるいは直観を通して自然の中に豊かな神の創造の力を観ようとするゲーテの

立場は基本的にスピノザとは相容れない。しかし恣意的な情熱に振り回され、危機に瀕しつつあったゲートが束の間、スピノザの哲学に慰安を見いだしたことは十分に首肯される。『詩と真実 (Dichtung und Wahrheit)』において、この当時の彼の精神に及ぼしたスピノザの平和な作用について、感謝の念を込めて、ゲートは述懐している³⁶⁾。しかし、あくまでもスピノザへの傾倒はこの時期のゲートの精神的な危機を背景に評価されるべきであって、過大にスピノザのゲートへの影響を考えることはゲートの本質を見誤ることになる。自然を必然性の相、永遠の相において観ようとする姿勢はゲートがスピノザから学んだ貴重な視点と言えるであろうし、このような視点に立って、ゲートの自然科学研究がなされたことはまぎれもない事実であろうが、スピノザの一切の経験的な知覚を排して、純粋に思惟の世界で、自然を、世界を思弁しようとする姿勢は、ゲートの自然科学研究の姿勢のみならず、ゲートの世界観とは根本的に相容れないものであることをわれわれは見落としてはなるまい。

さらにこの時期、ゲートは古代美術の世界へと関心を向ける。疾風怒濤期には、むしろ彼の関心はゴシックの美術にあり、とりわけエルヴィン・フォン・シュタインバッハ設計のストラスプールの大聖堂に震撼させられ、ゴシック的なものこそがドイツ的なものだと言わせるまでに、彼はゴシック芸術に熱狂し、それが疾風怒濤期ゲートの精神的な高揚の一つの起爆剤ともなったが、疾風怒濤期以後の、中期の、或いは古典期のゲートはむしろその関心を古代芸術に向ける。この時期の古代芸術への関心がどのようなものであったかをよく示すものとして、ゲートの『第二次ローマ滞在 (Zweiter römischer Aufenthalt)』、或いは『イタリア紀行 (Italienische Reise)』の次のような言葉が挙げられる。

高い芸術的な作品は、同時に真実の、自然な法則に従った人間による最高の作品とし

て生み出された。あらゆる恣意的なもの、あらゆる空想的なものが瓦解するところ、そこに必然性があり、神がいる。³⁷⁾

自然が規範とする法則に従って、彼ら (ギリシア人) は行動し、私もまた彼らの軌跡の上を歩んでいる。³⁸⁾

自然を情緒的、恣意的に観ることを拒否する姿勢がここにも端的に見られる。「自然な法則 (natürliche Gesetze)」「自然が規範とする法則 (die Gesetze, nach welchen die Natur verfährt)」を追求しようとする姿勢がここでは顕著である。自然の働きは恣意的なものではなく、合法的・必然的なものであって、自然が恣意的に見えるのはわれわれの自然を見る目が混乱し、恣意的なものにとどまっているからであるという確信がここにはあり、それがこの時期、ゲートをして深く古代芸術への関心を深めさせる動機となっている。

しかしスピノザ哲学、古代芸術以上にゲートにとって重要であったのは、自然科学研究であった。自然を恣意的に観るのではなくして、必然性の相でもって自然を見つめ直してみたいという思いが、中期以後、ゲートを強く自然科学研究へと駆り立てた動機であったと思われる。恣意的な感情、情熱をもって自然を観ることの不毛に倦み、疲れたゲートが自然科学研究にたどり着いたところに、彼にとっての自然科学研究の意味があった。したがって、ゲートにとって自然科学研究は一文学者の片手間の手すさび、ディレタントとしての仕事ではなくして、彼の自然観を新たに構築するための極めて真摯な哲学的、文学的な営為であり、精魂傾けての真剣勝負であったと言うことができよう。そうでなければ、あれ程までに感情的にニュートン、或いはその亜流の自然科学者に対決姿勢を崩さなかったゲートの真意は理解され得ないであろう。言わば、彼の自然観、世界観の構築のためのどうしても避けては通れない仕事であった。あの膨大な労力を純粋に文学的な営みにつぎ込

むことができたなら、あれ程の天才をもってすれば、いかほどの優れた文学的な業績を上げることができたであろうと考えるのは早計である。彼にとっては自然科学研究こそが彼の文学をあらたに根底から再構築するものであった。

注

- 1) コリン・ウィルソン著、中村保夫・中村正明訳、『ルドルフ・シュタイナー』河出書房新社、1986年、67ページ。
- 2) Vgl. Glückliches Ereignis, Goethes Naturwissenschaftliche Schriften, Bd. I, herausgegeben von R.Steiner, aus Goethes Werke in Kürschner's 《Deutsche National-Literatur》, Sansyusya, Tokyo, 1974, S.108-113.
- 3) J.W.Goethe, Faust, in Hamburger Ausg., Bd.3, Verlag C.H.Beck München, 1976, S.63.
- 4) *Ibid.*, S.22.
- 5) Rudolf Steiner, Goethes Weltanschauung, herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach/Schweiz, 1976, S.56.
- 6) J.W.Goethe, Naturwissenschaftliche Schriften, in Hamburger Ausg., Bd.13, Verlag C.H.Beck München, Bd.13, S.26.
- 7) *Ibid.*, S.26.
- 8) *Ibid.*, S.27.
- 9) *Ibid.*, S.30.
- 10) *Ibid.*, S.30.
- 11) *Ibid.*, S.30.
- 12) *Ibid.*, S.31.
- 13) Rudolf Steiner, Goethes Weltanschauung, S.31.
- 14) *Ibid.*, S.45.
- 15) J.W.Goethe, Naturwissenschaftliche Schriften, S.45.
- 16) 17) *Ibid.*, S.47.
- 18) J.W.Goethe, Die Leiden des jungen Werther, in Hamburger Ausg., Bd.6 Verlag C.H.Beck München, S.52.
- 19) *Ibid.*, S.52.
- 20) *Ibid.*, S.51.
- 21) *Ibid.*, S.52.
- 22) *Ibid.*, S.83.
- 23) *Ibid.*, S.95.
- 24) *Ibid.*, S.84, 85.
- 25) *Ibid.*, S.53.
- 26) R.Ch.Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, zweiter Band, Wilhelm Fink Verlag, München, 1979, S.237.
- 27) スウェーデンボルグの若きゲーテに及ぼした影響については、R.Ch.ツィンマーマンの『若きゲーテの世界観』にその詳細な研究がある。
- 28) 29) 30) J.W.Goethe. Faust, S.22.
- 31) *Ibid.*, S.22, 23.
- 32) *Ibid.*, S.23.
- 33) Vgl. *Ibid.*, S.24.
- 34) *Ibid.*, S.24.
- 35) Rudolf Steiner, Goethes Weltanschauung, S.39.
- 36) Vgl. J.W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, in Hamburger Ausg., Bd.10, Verlag C.H.Beck München, S.76-78.
- 37) J.W.Goethe, Zweiter Römischer Aufenthalt, in Hamburger Ausg., Bd.11, Verlag C.H.Beck München, S.395.
- 38) J.W.Goethe, Italienischer Reise, in Hamburger Ausg., Bd.11, Verlag C.H. Beck München, S.168.

(1998年10月13日受理)